

# 入院による母子分離状況が児に及ぼす影響

分担研究者 雨 森 良 彦  
研究協力者 今 泉 岳 雄  
和田 美代子  
金子 和子  
今村 法子  
西岡 暁子  
田島 宏子  
金子 令子  
柳瀬 義男  
佐藤 嘉子

## 研究目的

母子分離が子どもに与える影響については、すでに様々な研究が行なわれてきている。特に母親から離されて入院した子どもは母親にかわるマターナル・ケアを受けられず、しかも外的ストレスの強い状況におかれる為に、分離体験が子どもに与える影響は少なくないと考えられる。入院体験が子どもに与える影響について知ることは、これからの小児科病棟のあり方を考える上でも重要なことと思われる。

本研究は母親から離されて入院した子どもが、入院中どのような反応を起し、入院による影響が退院後どのような行動として現われるのかを明らかにすることを目的として行なわれたものである。

## 研究方法

### 第一研究：アンケート調査

退院後の子どもの行動変化を知るために、日赤医療センター小児科を退院した4才以下の子どもを対象に親宛にアンケート用紙を送り回答を求めた。回答数は100名で回収率60%であった。回答を得られた対象児の内訳は、年令1ヶ月～4才0ヶ月、男児57名女児43名、入院期間は2日～65日であった。

アンケート用紙は、予備調査の結果に基づき、「食事」、「睡眠」、「排泄」、「生活習慣」、「言葉」、「母親との関係」、「社会性」、「習癖」、「性格・行動」、「病院・白衣への恐怖」、の10領域について、退院後の変化を記述した計

148項目のうち該当するものにチェックするように作成されている。

## 調査結果

①対象児100名中、退院後何らかの行動変化があったものが97名、変化なしと答えたものはわずか3名であった。

②アンケート項目のうち出現率の高い項目をみると(表1)、母親に対する「分離不安の増強」(47.9%)、「甘えの増強」(40.4%)、など母子関係の変化を示すものや、「食欲増加・過食傾向」(35.0%)など食行動の変化が高くでている。

③年令別の出現率をみると「分離不安の増強」は7ヶ月～3才0ヶ月で高く、7ヶ月～1才0ヶ月の群でピーク(81.3%)を示しており、6ヶ月以下と3才1ヶ月以上で極端に低くなっている。これは、「病院・白衣への恐怖」の年令による出現傾向と一致している。年令別の最高頻度項目は、6ヶ月以下が「指しゃぶり」(44.4%)、7ヶ月～1才が「分離不安の増強」(81.3%)1才1ヶ月～2才0ヶ月が「分離不安の増強」(58.6%)2才1ヶ月～3才0ヶ月が「分離不安の増強」(57.1%)、3才1ヶ月～4才0ヶ月が「甘えの増強」(55.6%)であった。

④性別では「発語・発声の増加」が男児に多い他は有意な差は認められなかった。

⑤入院期間別では、入院期間が長くなるほど「分離不安の増強」「甘えの増強」が高くでいて

る。

## 考 察

以上アンケート調査の結果から、①からは大半の子どもが入院によって何らかの心理的影響をうけることが明らかとなった。

②については、入院による母子分離体験が母子関係を不安定にさせたことが考えられる。分離体験はいわば子どもが母親を求めめるアタッチメント行動の挫折と考えられ、退院後の母子分離不安や母親への甘えの増強は、子ども側からの母子関係の修復行為と考えられる。

③の「分離不安の増強」と「病院・白衣への恐怖」の年齢による変化がほとんど同じ傾向を示している。これは6ヶ月以下の子どもでは入院体験と病院白衣が結びつかないことや母親を他者から弁別することができないなど認知面での能力が未発達なことを示している。このことから母親への十分なアタッチメントが形成されていないことが予想できる。従ってこの月令の子どもでは、母子分離入院による外からの言語的働きかけや身体接触の乏しさ、外的ストレスの影響が、退院後母子分離不安や甘えの増強よりも指しゃぶり、乳飲量の増加、発声の増加など、より感覚生理的な行動にあらわれやすいといえよう。

一方3才以上の子どもは、発達的に表象期段階に入っており、母親がいなくても母親の存在を表象化することができることや、病気、入院についてもある程度理解することができる為に、退院後分離不安を示すことが少なく、病院・白衣も恐怖の対象とはならないことが考えられる。これらのことから、母子分離入院の影響は母親が子どもの愛着対象になっているか否かや認知能力の発達によって異なるといえよう。

### 第2研究：症例研究

アンケート調査の結果から、母親との分離による影響を受けやすい年齢群に属する2才5ヶ月の男児の入院中の反応行動を観察し、分離による影響について症例研究を試みた。

<症例> R. S 2才5ヶ月 男児

家族構成：両親、弟、本人。病名：ケトン性低血糖症。主訴：けいれん発作の為に検査入院、入院期間：5日間（初回入院）。入院中56時間抑制

帯装着。面会：毎日午後3時から3時間。

母親との面接、Ainsworthによるアタッチメントの13の行動指標に基づく質問紙、津守式発達検査を行ない、本児の生育歴、入院前の母子関係、子どもの特徴を明らかにした。

(1)生育歴——未熟児で生まれ、2ヶ月半哺育器に入れられ、その間母子分離されていた。発育は順調（発達指数DQ=100）。1才2ヶ月時に弟出産の為6日間母子分離された。

(2)入院前の母子関係、本児の特徴。

本児——母親への愛着行動が強い。人見知りが強くと、strangenessによって不安緊張が高まりやすい。

母親——抱く、おぶる、キスするなど本児に対する身体接触が多い。未熟児で生まれた為に不憫でかわいそうという気持がある。反面、出産直後から2ヶ月半も本児と離れていたため自分の子だという実感がもてず、悪いとは思いが弟の方が可愛い（本児へのアンビバレンツな感情と弟への偏愛傾向）。

### 入院中の行動観察

（観察方法）入院中の反応行動を観察記録者とビデオカメラによって観察した。

観察期間：入院日から3日間と退院日。

観察場面：初日——①入院時母子場面。②母親一時帰宅による分離場面。③一人場面。④再会場面。⑤分離場面。⑥夜の一人場面。2日目と3日目——上記③④⑤⑥場面。退院日——③場面と再会退院場面。合計16場面。

観察時間：各場面30分間、合計8時間。

入院中に観察された反応行動

- ・入院時（母子場面）——指しゃぶり（入院前には指しゃぶりの習癖はなかった）
- ・分離場面——母親を求めて激しく泣く。
- ・一人場面——うつろな表情。活動性の著しい低下。母親を呼び求める弱々しいcrying。感触を求め常同行動（フォーレの管、衣類、おもちゃ等をいじる）。猫のぬいぐるみをかかえる、身体の上のにせる。
- ・看護婦の食事・着替えの介助に対する反応——拒否、抵抗（面会時以外は拒食が続く）
- ・看護婦の話しかけ、なぐさめに対する反応

発語量の増大、強い追視行動。

次に一人場面でみられた特徴的な行動についてビデオ録画から10秒のtime sampling法により出現頻度を測定したところ、図1に示すようにぬいぐるみに関わる頻度が圧倒的に高いことが分った。このぬいぐるみは本児が生まれる前から家にあったもの(familiarityをもつ)だが、入院前には全く関心を示さなかった。退院日には処置室に連れていかれる時も離さず、母親がいる間もかかえて離さないなどが観察された。

次に、入院による影響をみるために、退院翌日、約1週間後、1ヶ月後、2ヶ月後の計4回の母親面接によって本児の退院後の変化、母親の本児に対する感情、行動の変化をfollowした。

#### 退院当日の行動

- ・自宅に入らず好きな女兒に会いに行き一緒に遊ぶ。
- ・家に入ると祖母にあづけてある弟を探し回る。
- ・はしゃぎまわる。(活動性の増大)

#### 退院後の行動変化

(消失したもの)

- ・母親への後追いが激しくなった(分離不安の増強。2~3日続く)
- ・母親への依存の増強
- ・母親の注意関心を求める行動の増強。
- ・頻回の便意の訴え(1日4回~10回トイレに行く)
- ・猫のぬいぐるみを一日中かかえて歩く、人にさわらせない、夜も一緒に寝る、「パパ、ママよりニャーニャ(ぬいぐるみ)の方が大事」おぶる、子守歌をうたうなど母親的な行動を示す。(約2週間続く)

(持続しているもの)

- ・母親への甘えの増強
- ・母親にほめられようとする行動(承認欲求、愛情欲求)
- ・好きな女兒のいうなりになる。
- ・弟への嫉妬・乱暴。
- ・夜尿。
- ・食欲増加・過食傾向(体重増加)。
- ・Strangerの接近、働きかけに対し指しゃぶりをする。
- ・弟や自分が母親に叱られると「注射注射」と

いう。

母親の本児に対する感情、行動の変化

- ・一層不憫に思う。
- ・本児を何よりも優先。
- ・甘くなり叱れない。
- ・弟への嫉妬、乱暴により、本児に対し「いじわるな子」「憎らしく思う」という本児に対するnegativeな感情が出現。

} 消失

#### 考 察

入院中の行動観察からは①母親が強い愛着対象となっている本児は、入院によって母親からひき離されることで激しい情動反応を示し、分離中は終始母親を呼び求めるという愛着行動が認められた。②強いストレス下で孤独におかれた状況では、一種の不安制止行動と考えられる常同行動やぬいぐるみをだくといった行動を示したが、それらはいずれも感触を求める行動であり、身体接触の多い入院前の母子関係との関連性をうかがわせる。③ぬいぐるみは単に不安制止の役割をもっただけでなく、積極的な愛着対象に移行していったものと考えられる。たまたま看護婦からの話しかけや慰めがあると、それに対し発語量の増加や強い追視行動がみられるなど、人見知りの強い本児も、一人で放置された状況では無差別に愛着の対象を求めていることが分る。

家からもってきた玩具類の中からぬいぐるみが愛着の対象に選ばれたのは、本児にとってfamiliarityをもつものであり、入院によって失なわれた愛着対象を含む家庭環境と密接に結びついたものであることと、肌ざわりのよさや生き物を形どっているなど愛着対象になりやすいぬいぐるみの属性によると考えられよう。人間以外のものでも愛着対象になりうることが示唆された。

退院後にみられた行動としては、①退院当日の行動は、入院中喪失していた対象をとりもどす行動であり、活動性の増大は入院中の極端な行動制限からの解放と喪失していた環境の回復によると考えられる。②入院中に愛着対象となったもの(ぬいぐるみ)に対し退院後も一定期間強い愛着を示すだけでなく、それに対して母親的な行動をとっていることは心理学的に意味深いことと思われる。③入院による母子分離の影響は、退院後母

親への愛着行動の増強、弟への嫉妬、乱暴、好きな女兒のいいなりになるなど、愛情をめぐる対人関係全体の変容をもたらすことが明らかにされた。④本児の入院は、母親の子どもに対する感情や行動の変化をももたらすこと。弟への嫉妬、乱暴は本児への negative な感情をひきおこし、それは弟への偏愛傾向といった入院前の母子関係との関連性をうかがわせる。⑤本児に対する母親の negative な感情が本児に母親との関係に不安をひき起させ、それが母親への承認欲求、愛情欲求を強めるといった図式が考えられ、母子関係の変容には母子の相互作用が働いていることが示唆された。⑥退院後の食欲増加・過食傾向はアンケート調査でも高い出現頻度を示したが、このような食行動の変化は必ずしも positive な変化とはとれず、食行動が単に生理的欲求と結びついたものでなく、何らかの心理的な意味をもつことも考えられる。⑦本児にとって入院体験は一つの罰として受けとられていることも見逃せないことである。(母親の叱責と「注射」という入院体験が結びついている)

## ま と め

以上、アンケート調査及び症例研究から、入院による母子分離体験は子どもに何らかの心理的影響を及ぼすことが明らかにされ、それは子どもの年令、発達段階、入院前の母子関係、入院期間などによって異なることが示唆された。特に症例のように母親に対し強い愛着をもつ子どもにとって、母子分離入院は退院後母子関係を中心に愛情をめぐる対人関係全体に影響を及ぼすことが考えられる。また母子関係の変化には母子の相互作用が働いていることも示唆された。症例にみられたように、母親から分離され、母親にかわるマターナル・ケアを受けられずに強いストレス下に孤独におかれた子どもは、何らかの愛着対象を求めていることが考えられる。このことは、完全看護によって医療的ケアは万全でも心理的ケアを欠いた小児科病棟のあり方を見直す必要性、小児科病棟への保母の導入の必要性などを示唆しているといえよう。

表1. 出現頻度の高いアンケート項目

各数値は有効回答数に対する出現率(%)を示す

順位	項目内容	出現率 (%) N=100	年 令 別					有意差	性 別		有意差	入 院 期 間 別					有意差
			～6ヵ月 n=21	～1才 n=17	～2才 n=29	～3才 n=22	～4才 n=11		男 n=57	女 n=43		～3日 n=13	～1W n=28	～2W n=31	～1M n=15	Over n=13	
1	母親が離れるのをいやがって泣いたり、後追いが激しくなった	47.9	15.8	81.3	58.6	57.1	0	**	52.8	41.5		53.8	42.3	27.6	78.6	66.7	*
2	母親への甘えが強くなった	40.4	10.5	43.8	48.3	47.6	55.6		43.4	36.6		7.7	23.1	41.4	64.3	83.3	**
3	食欲が増した、食べ過ぎ(飲みすぎ)ようになった	35.0	33.3	41.2	44.8	27.3	18.2		41.5	30.2		15.4	32.1	29.0	46.7	61.5	
4	病院や白い服を着た人を怖がるようになった	32.3	11.1	53.3	37.9	40.0	9.1		37.3	26.2		46.2	32.0	17.2	50.0	33.3	
5	よく話すようになった(声を出すようになった)	24.1	35.3	9.1	34.5	20.0	0	*	36.2	10.0	**	8.3	15.4	30.8	21.4	55.6	
6	泣き虫になった	23.0	0	23.1	25.0	35.0	27.3		21.3	25.0		9.1	25.0	23.1	20.0	36.4	
7	夜中に起きたり、泣いたりするようになった、回数増えた	19.4	19.0	43.8	10.7	22.7	0	*	19.6	19.0		33.3	21.4	19.4	13.3	8.3	
8	自分で食べようとするようになった	19.0	4.8	17.6	27.6	18.2	27.3		24.6	11.6		15.4	3.6	16.1	20.0	61.5	**
9	甘えた口調になった	18.4	5.9	18.2	13.8	25.0	40.0		19.1	17.5		8.3	15.4	15.4	28.6	33.3	
10	就寝時間が変わった	18.4	14.3	12.5	25.0	27.8	9.0		19.6	16.7		8.3	25.0	11.6	13.3	25.0	

\*P<0.05 \*\*P<0.01

症例 R.S.

入院中の特徴的な行動の出現頻度

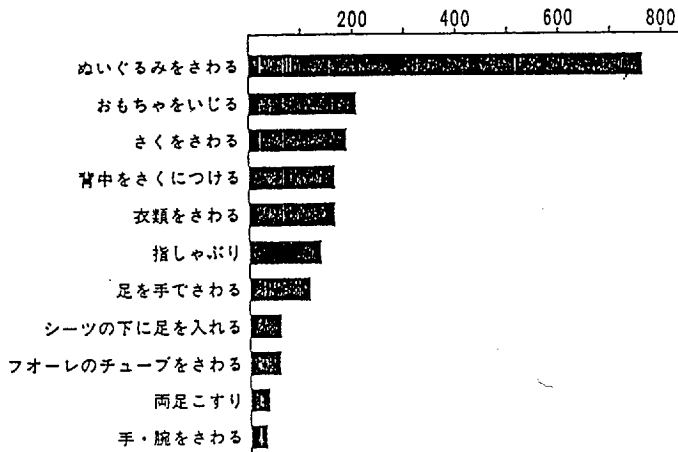
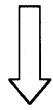


図1



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 研究目的

母子分離が子どもに与える影響については、すでに様々な研究が行なわれてきている。特に母親から離されて入院した子どもは母親にかわるマターナル・ケアを受けられず、しかも外的ストレスの強い状況におかれる為に、分離体験が子どもに与える影響は少なくないと考えられる。入院体験が子どもに与える影響について知ることは、これからの小児科病棟のあり方を考える上でも重要なことと思われる。本研究は母親から離されて入院した子どもが、入院中どのような反応を起し、入院による影響が退院後どのような行動として現われるのかを明らかにすることを目的として行なわれたものである。